

掬われた声，反射する声：

なぜブラック・サッシュに参加したのか，しなかったのか

上 窪 一 世

Voices :

Why I joined the Black Sash, or not

KAMIKUBO Kazuyo

はじめに

本稿では，南アフリカ共和国（以下南ア）において白人女性を主とした反アパルトヘイト組織，ブラック・サッシュが結成された1955年から1960年までを対象にブラック・サッシュに参加した女性達と参加しなかった女性達のそれぞれの理由をニュースレターに投稿された手紙や報告のなかから拾いあげる。

従来，ブラック・サッシュの活動自体についての詳細な記述はあるものの，そこに集った人々がなぜ，どのような思いを抱いて参加していたのかあるいは参加に至らずともどのような関心を寄せていたのかを考察したものはない。しかし，ブラック・サッシュが人との繋がりが，顔の見える関係のなかで展開してきたことを考えるとこうした声が活動を展開し，継続させた推進力のひとつともいえる。

この考察を通して各時期ごとに人々がどのような思い，考えをブラック・サッシュに投影させていたのかという時代や社会の反射としての個人の心情とブラック・サッシュがどのような存在として認識されていたのかという関係性が合わせ鏡として浮かび上がるはずである。

なぜ参加したのか

《結成直後》

検証に入る前にこの時期のブラック・サッシュの状況とそれを取り巻く社会状況について

述べておく。ブラック・サッシュは「上院法」反対という明確な目標を掲げて1955年に結成された。結成のきっかけとなる6人の女性によるお茶会から僅か6日後の5月25日には、2500人も女性と共に市庁舎までデモを行い、また、女性だけの嘆願書を作成し、呼びかけたところ、10日余りの間に全国から10万人もの署名が集まるほどの盛り上がりを見せた。しかし、6月16日、法案の採択という結果に終わった。

採択後は、抗議の矛先をストレイダム首相の辞任要求へと転換させて活動を続行したものの、初期のような熱気を維持することは困難となっていた。そのため活動の継続、終了を含む将来の方針をめぐって議論が噴出した。活動の継続は、政府に対するより一層踏み込んだ抗議、つまり、「白人優越 (white supremacy)」との対決を射程に入れていくことを意味しただけに、慎重にならざるを得なかった。組織の方向性と組織を立ち上げる起爆剤となった「上院法」に代わって人々の関心を引き付け続ける争点を模索する状況は、1955年11月29、30日に開かれた初の全国会議で、憲法を遵守していくという以上の方針を打ち出せなかったことに象徴されていた [Michelman 1975:54]。

ただし、こうした活動をめぐる模索状況は幹部レベルでは焦燥感があっただろうが、多くの参加者達にはまだ、結成後の高揚感があったと思われる。そうした感覚のズレは以下に検証する参加者からの声に反映されている。

以下では、機関誌 *The Black Sash* (後年、SASHに改名) 1956年3月号の7ページに初めてコーナーを設けて掲載された Why I became a Black Sash Woman をはじめとして機関誌に寄せられた参加者達の声拾い上げて、彼女達がなぜブラック・サッシュに参加しようと思ったのか、あるいは参加を躊躇したのかを検証していく。なお、説明はないものの以下の寄せられた声のタイトルは編集側がつけたものと推測できる。編集側の意図という点に留意しつつ検証していく。

〈なぜブラック・サッシュの一員になったか〉

1956年3月号のニュースレター *The Black Sash* で Why I became a Black Sash Woman と題して匿名で会員の声が発載されている¹。そこには南アに見切りをつけてヨーロッパのどこかに安住の地を見つけようとイギリスに向かう友人とのやりとりがまず、再現されている。年老いた母を住み慣れた家から引き離すことに心痛めながらもその友人は、南アの政治状況に我慢ならないとこの地を去る決意を語った。それに対してこの会員は悲観的すぎるのではないかと問いかけたが、友人は最後の失敗を待つよりも今行く方が最善だと答えた。さらに、南アは終わっている、今は南アに住むべき場所はなく、私たちは向かうのだという返事であった。

この友人とのやりとりを機に会員は考えを深めていった。友人の語ったことはあながち誇張

¹ *The Black Sash*, vol.1 no.3 March 1956, p.7.

ではないとするならば、市民が口をつぐんだまま闘わずして自分の権利を進んで放棄することは悲劇ではないかと。さらにこの南アの土地そのものへの愛情もあると。南アのそれぞれの地域のもつ豊かな自然の素晴らしさを振り返りながら彼女は、最後にこう決意して締めくくっている。「いいえ、と私は考えました。私は南アから決して逃げ去るようなことはしないと。そして、それが私にとっての始まりでした」²。

ここには直接ブラック・サッシュに関わった経緯などは記されていないが、友人とのやりとりのなかで深く南アと自分との今後について考えるようになった根本的な決意が述べられている。彼女のように親しい人間が南アに見切りをつけて去る姿に考える契機となった人間は少なからずいただろう。そうした人間にとってブラック・サッシュは受け皿となっていたのである。

〈なぜ、ブラック・サッシュに参加したか。ごく普通の会員より〉

さらに別の会員が、ブラック・サッシュに参加するまでの心の変遷を次のように述べている：

私が初めてブラック・サッシュについての記事を目にしたのはイギリスにいたときでした。一握りの女性達が提案されていた上院法に抗議するとして黒いタスキを身につけユニオン・ビルディングの外に立つことを決めたという内容でした。サウアー氏³が「これから皆さんの多くとお会いすることになるでしょう」と愛想よく発言したと報道されていました。その女性達は6ヶ月街頭に立つつもりだと宣言していました。

私はただ、笑ってしまいました。私はこうつぶやいたのです。“なんてバカ者達なの。彼女達は何かやりたいことが欲しいにちがいないわ。誰が気にかけるかしら。何の影響を与えるというの。”

私は南アの小さな田舎町にもどりました。48時間もしないうちに私はブラック・サッシュに参加しないかと誘われました。私は丁重に断りましたが、誰がこの地元で会員となっているか探りました。驚いたことに、主にこの町の知的で非常に尊敬を集めている人達から構成されていることを知りました。さらに、抗議で街頭に立っている人達にはお年寄りや体の弱った人達が多いということも知りました（町の平均年齢は50代を優に超えていたに違いありません）。私の良心はかき乱されました。私の年上の友人達がやる価値があると思うなら、次に私ができる最低限のことは彼女達の傍らに立つことでした。

私は試しに地元の空港で立つことに同意しました。この試みは印象的でした。私は事務局長の役割を担ってくれるようにしきりに勧められました。私は（丁重に）断りました。

² Ibid.

³ 特に説明はされていないが、おそらく国民党のベテラン政治家ポール・サウアー（Paul Sauer）であろう。サウアーは1946年、国民党が人種問題についての政策を進めるための委員会を設置したが、委員長を務めた。その報告書（サウアー報告書）では1)カラードを厳格に隔離すること、2)アフリカ人居留地を統合してアフリカ人教育に対する教会の支配を排除すること、3)原住民代表審議会と国会で白人議員がアフリカ人を代表する制度を廃止すること、を勧告した。レナード・トンプソン（1998）『新版 南アフリカの歴史』明石書店、327ページ。

私は再び若くはない仲間達と立ちました。私達ははやし立てられたり、トイレトペーパーでからかわれたりしました。しかし、穏やかで控え目な女性達がしっかりと立ち、その尊厳でもって、こうしたバカにする人達に恥をかかせないまでも少なくとも黙らせました。私は事務局長を引き受けました。

尊厳の精神と悪を正そうという静かなる決意とが日々の夜通しの抗議や大規模なデモ、昨年の奇跡的なコンボイ・ドライブ⁴などを喚起させました。その同じ精神は今日生きており、独裁と不正に反対する多くの普通の女性達を繋げています。今や、誰が彼女達の努力が無駄だと言おうとするでしょうか。

ここには一人の女性が、距離感を持ってブラック・サッシュを見ていたのが、町で尊敬を集める人だけでなく、年配者など社会的弱者も関わっているという事実を通じて積極的に参加していく様子が表れている。人との具体的なかかわり、顔の見える関係が存在し、大きな参加理由となっていた。また、「独裁と不正に反対する多くの普通の女性達を繋げています」という表現にブラック・サッシュが政治団体とは異なる身近な存在として受けとめられていたことが分かる。

《結成後5年》

結成から5年がたったこの時期は、結成当初の上院法反対というほどの明確な目標はなく、また、人々の熱気も鎮静しつつあった。さらに政党政治による変革に望みをつないでいたものの頼みとしていた連合党は1958年の選挙で大敗し、また人種問題に対する姿勢の違いなども浮かび上がり齟齬を来たしていた。そのため次なる活動の方向性を模索しつつあった⁵。こうしたなかで「アフリカ民族会議女性同盟 (ANCWL)」などとの連繋により、パス法に違反したとして拘留されたアフリカ人女性の保釈費用などを賄う保釈金制度活動やさらに発展させた活動を行うアドヴァイス・オフィスの全国都市部への設置、異人種間接触の試みなど各地域の支部を中心に手探りしていた。

次は1960年3月号のニュースレターに組まれた *More members tell why they joined the Black Sash* というページに掲載された4人の声を見ていく⁶。

〈ナチスドイツ〉

B. マリーは、ナチスドイツをひきあいに出し、南アはそれに比べれば悪くはないとしながらも南アでの肌の色による格差と見通しの暗さを嘆いた後、「ある女性達にとって政党政治

⁴ ケープタウンで行われた抗議行動に全国から駆けつけたこと。

⁵ 活動の方向性をめぐって結成呼びかけ人 (オリジナル・シックス) の一人ルース・フォリー (Ruth Folly) は代表を辞任した。それまで政府の「白人優越主義」に対して踏み込まずにいたが、この点に触れずに活動することは困難であると考えた他幹部・会員との間に亀裂が生じたのが理由だった。

⁶ *The Black Sash*, vol.4 no.3 March 1960 ,pp.8-9.

は難しくてよく分からないものであり、自分もそのひとりです。私は政党の方針をよく吟味した上で自分が選んだ政党を支持しています。ですが、「もっとやりたいという熱意が沸き上がってきません」とし、政党政治への距離感と自分に何ができるのだろうかという虚無感があったことが述べられている。こうした心情が「私は直接不正と闘うことには熱意をもつことができます。簡素な方法である沈黙の抗議であってさえも。ブラック・サッシュには抑圧された人々を助ける多くの直接的な手段があります。それは才能と時間と興味次第であり、社会科学の学位は必要ないのです。つまり、必要なのは少しの思いやり (compassion) なのです」という様に変化している。このことからブラック・サッシュの方法が一般の人にとって特別な才能を必要としない、分かりやすさをもっていたことが分かる。

最後に文章は次のようにしめくくられている。「もし、我々の抗議が失敗したり、もし、我々の努力が弱すぎるあるいは努力を始めるのが遅すぎて南ア全体の構造が崩壊しても、抗議をしたことや壊れてしまった我が家、警察の襲撃によって引き起こされる恐怖、自由の欠如、どこにいても望まれていないという感覚に関心をもったことはよいことだと思う」と述べられ、関心をもつことそのものが重視されている。

〈個人主義者〉

次はメアリー・ストイという女性の理由である。彼女は自分が個人主義者であることを述べ、政府は個人のために存在し、その逆ではないと主張している。そして、「私にとって政府は良きものであり、法というものは政府が法を尊重し、国家を構成している個人の権利を擁護してこそのものである。今日、至るところでこの見解は無視され、個人が無情にも国益や‘プロレタリアートの独裁’、‘白人優越主義といった無意味な抽象的概念の犠牲になっている」と述べ、政府とその体制を厳しく批判している。そして「ブラック・サッシュは私には政治的利益のもとに個人が統制されていることに反対してくれる組織に思える」と期待を寄せている。また、「私は議会制民主主義を信じているが、健全な議会政治は強固で健全、かつ批判的な反対派を欠いては機能しえない」のであり、「いまの野党勢力はそれを忘れてるか、全く知らないのではないか」と政党政治、議会政治の在り方への批判も述べられている。それ故「野党のへっぴり腰の行動は、私をかなりいらつかせていたのでブラック・サッシュが議会の中よりも議会の外でより精力的に反対の動きを始める前から私はブラック・サッシュに参加する用意ができていた」という。また、最後には「昔、男性と女性は私を受け継いでいる文明化をなしとげるために闘った。この文明化は私に多くの利益をもたらしている。私は過去のこうした男性、女性に負っている。つまり、私はこの減ることのない遺産を私の子供達に受け渡さなければならないという借りがある。ブラック・サッシュのなかで私は過去への自らの借りと子供達への義務ということ意識している他の女性達と共に活動できると思う」と述べている。

全体として、個人の尊重をベースに議会政治への幻滅と同時に政治に対する大人としての

責任感が感じとられ、ブラック・サッシュやそこに集う女性達にもそうしたことを期待していることが読み取れる。

〈政府のやり方を嫌悪する〉

3人目のマーガレット・レイニアーは次のように述べている；

私は4年前にブラック・サッシュに参加しました。というのも当時、南アの名のもとに国民党政府が犯していた蛮行に対して私が対抗できる効果的な方法を他に知らなかったからです。(略)私は野党側の政治家の冷淡なまでの無責任さを軽蔑しました。彼らは明らかに道義的な問題に対して異議を唱えようとしめない、できないように思えました。私が議会で当選するように手助けした人達は、私には卑しくも職務を果たしていないと思えました。彼らは多くの普通の人々をかき乱す不安や憤りをもっと熱意をこめて表現しようとしませんでした。その恐ろしいまでの悪に直面して、私はなすすべもない気持ちになりましたが、傍観したままで満足することはできませんでした。私は自分の仕事、つまり、子供を産み、家庭を守ることは当分の間、私の最上の仕事であることを疑っていませんでした。しかし、同様に私は公的な責任も共有していると分かっていました。そうしたときにブラック・サッシュが登場したのです。彼女達の最初の劇的なデモに参加した女性達は、私が持っている理想と同じものをもっていることは明らかでした。私は彼女達が行っていること全てに参加することはできませんでした。ですが、ブラック・サッシュに参加するだけで私は彼女達の勇気ある抗議に自分を関わらせることができたのです。それが私の行ったことでした。今回、私がクリストファー・ゲルに会った時のことです。彼が抑圧された人々のために懸命に戦ったことは、彼が自分は死に行くと思っていたが、私の最も深い尊敬と賞賛の念を呼び起こしました。私には自分に英雄的な資質がないことを分かっていました。彼はそのため障害を乗り越え、生きた伝説となってしまったのですが。しかし、彼が示してくれたことは私が常々疑っていたことを晴らしてくれました。昔から負けた人間が繰り返すいう‘私に何ができるというのか’という台詞は何もしないことへの単なる言い訳にすぎないということです。たとえもし、最後に私達を脅かす悪しき政策が浸透したとしても(そんなふうになるとは信じませんが)、少なくとも私は自分の良心と子供達に後々聞かれたとき、つまり、‘こうした事態が起きていたときにあなたは何をしていたの?’に答えたいと思います。まだ、うまく答えられていませんが。ですが、私は自分の無条件な支援をブラック・サッシュに捧げます。彼女達は私が大切にすることを支持する人に多くのことを成し遂げています。

さきのメアリー・ストイと同様に彼女の言葉にも政党、議会に対する幻滅が感じられる。また、アパルトヘイト体制を「道義的問題」と捉え、それ故体制への抗議も「道義的な発露」と位置付けているが、こうした傾向は他のブラック・サッシュ参加者のなかでも見られた。レイニアーは妻や母の役割以外にも自分の良心や公的な責任といったものに後押しされるように、非力な自分でも何かしたい、せねばという思いが蓄積していたところにブラック・サッシュが結成され、そうした思いがすくい取られたといえよう。

〈素晴らしい活躍〉

4人目は B. M. と名乗る女性の文章である。

ブラック・サッシュが初めて登場したとき、私はトーチ・コマンド⁷の女性版だと思いました。

賞賛に値するデモ、しかし、それ以上ではないと。私は沈黙の抗議として街頭に立つ女性達を賞賛しましたが、私自身は参加しませんでした。というのも私には既に壊れてしまった憲法を守ることと嘆くこともどちらも建設的で前向きな使命とは思えなかったからです。

今やブラック・サッシュは新しい憲法のための土台を準備するという現実的な使命以上のことを敢えて行っているのです、私には何のためらいもありません。彼女達は2点において素晴らしい仕事を行っています。ひとつは専門的に疑問に答えてくれる機能や雑誌を通してかなり多くの白人女性にこの国の抱える問題を気づかせていること。もうひとつは揉め事に巻き込まれた非白人の人達を積極的に助けることで人種間に良き心を持った人々を育てていること。それはこの国で西洋文明を維持する決定的な要素に十分なるかもしれません。ブラック・サッシュの人達はそうした活動に携わる唯一の人というわけではないですが、今日女性はそうした集団の重要な半分を占める存在であり、ブラック・サッシュの人々が他の組織と有効かつ分別のある協力によって、よりよい南アを築こうと考えている人々のなかで重要な地位を占めてきています。

私が年老いたとき私は自分がもし、ブラック・サッシュに積極的に関わらなければこの時期を恥ずかしさをもたずに振り返ることはできないだろうと思っています。

この女性はさきの二人と違い、初めは距離感をもってブラック・サッシュを見ていたのが問題を自覚させるような活動や非白人への手助けを見聞することで積極的に関わっていく気持ちに変化していったことが読み取れる⁸。さらに白人としての責任感を負っているような意識も見られる。また、ブラック・サッシュが白人女性への意識化を促しているという評価の仕方や女性が行動するということに対して評価していることから女性が政治的問題に関わることを評価している。

次に同じく1960年8月号の *SASH* にも *Why They Joined the Sash* と題した特集が組まれている⁹。そこに掲載された声を見てみる。

〈奉仕の見返り〉

アンナ・ピアースは、自分がなぜブラック・サッシュに参加したのかよく分からないとし、参加理由を説明する代りにブラック・サッシュが自分にとってなぜそれほどまでに意味があ

⁷ Torch Command のこと。主に退役軍人を基盤としたアフリカーナーナショナリズムに反対する勢力の広範な戦線。

⁸ 非白人への手助けとは57年から始まったバス法違反者に対する保釈金制度の活動を見聞きしてのことではないかと推察される。また、50年代後半は、設立当初のデモ行進や沈黙のスタンドといった行動から保釈金制度、法的、物的支援を行うアドヴァイス・オフィスの全国都市部への設置開始による直接的な支援が展開され始める時期である。

⁹ *The Black Sash*, vol.4 no.4, August, 1960, p.7.

るのかを説明しようとしている；

私はケープタウンの大集会でブラック・サッシュのメンバーの誠実さ、筋の通った思考に印象付けられて戻ってきました。彼女達は感傷も偏見も交えずに政治について議論していました。

私は彼女達の幾人かを次のような行動に移らせるものは何なのかと思いました。つまり、支部の人に話をするために500マイルもの道のりを行き、通りでスタンド（*抗議のために街頭に立つ行為：筆者補充）を行い（そのために道行く人に）唾を吐き掛けられる。あるいは、疲れきるまで動き、—ありのままに事実を認めましょう—夫や子供達、家庭のことを顧みないといったことに。

こうした犠牲への見返りはどこにあったのでしょうか。彼女達は自分自身のために闘っていたのではなく、真実、公正さ、人間としての尊厳のために闘っていました。高い理想のために焦燥感や失望といったことはありましたが。

私は今は次のように信じています。自分自身と同様に隣人を愛することができる気づいたとき、見返りの多くはこれらの活動のなかに存在しているのだと。ブラック・サッシュを通して、私達は隣人が本当に必要としていることを理解し、隣人を積極的に助けることを学んでいます。彼らの苦しみは私達の苦しみとなっているのです。

また、私達の闘いは悪に対する長い年月のかかる闘いの一部に過ぎないということも分かっています。この闘いは決して勝つことはないかもしれませんが、誰にとっても確実に素晴らしいことは、それに参加するということです。そうしてのみ私達は真の強さを知り、人生の目的を理解し始められるのですから。

ピアースの意見には道徳的、宗教的価値観のようなものが感じられるが、彼女がこうした思いを抱くに至った背景には、日常の活動を目の当たりにし、ブラック・サッシュの参加者が顔の見える個人として認識され、それ故に活動も切実さと親近感をもって訴えかけてきたことが文中から推察される。

〈正義の闘い〉

E. L. W. とだけ記載されたこの女性は次のように記している；

サッシュができた初めの頃は、彼女達の抗議やデモに興味を持って読んでいました。しかし、自分が参加を求められているという感覚はありませんでした。私はサッシュの目的についてほとんど知りませんでしたし、3人の子供を持つ身ですが、ナショナリストの政権に公然と抗議する勇気は全くないと確信していました。また、おぼろ気を感じたことですが自分が選んだ政党に参加する前に慎重に考えたとしても政治を身近に考えたいとは思いませんでした。しかし、十分に興味を持ってから1ヶ月分の寄付をしました。それで私は名目上の会員資格を得、機関誌も読んでいます。

サッシュに関して本当のところまだ、分かっていませんでしたが、いくつかの素晴らしい機会を経て私は、支部長になりました。この選出に際して、私はこれまでの日々感謝したいと思

ます。様々な仕事に放り込まれて私は急いで学ばなければなりませんでした。ブラック・サッシュのように会員に着実に情報を流している団体は他にはないと言われているのはほぼ真実です。これらの情報は市民権、自由、政府、地方自治、法案、法律、政党や政府の政策、サッシュによって行われている建設的な取り組みなどについてです。

サッシュは私に奉仕の場を与えてくれています。とりわけ政府のアパルトヘイト的法律（多かれ少なかれ多くのナショナリスト達によって承認された）に対する闘いにおいて。こうした場は他では見つかりません。また、政党ではない組織で活動するのは計り知れない価値があります。

キリスト教神秘主義についてのエヴリン・アンダーヒルの言葉がサッシュで活動する人達に当てはまるかもしれません：

あなたは世間—自分の好きなようにする場であり、欲望を満たそうと夢中なところであり、快楽や権力を求める闘いに満ちた場—が、激しさを伴う、あるいはむしろ起き上がろうとしない鈍重な動物達の大人しさに腹を立てながらのあなたの新たな熱意に対して反対するだろうということに気づくだろう。もし、あなたの新たな人生が何か価値あるものなら、それが物事のしつこい鈍さに対してぐさりとやったとき、より鋭利な権力に対して怒りの炎を燃やすだろう。というのもあなたはそれに基づいて行動すべき抵抗を必要としているし、正義の闘いは、生き生きとしてこの先も続いていく平和への唯一の方法だからです。

サッシュはこの熱意を生み出してきました。それは白人選挙民の余りの鈍さを突き、この正義の闘いに従事しています。こうした理由から私はサッシュに居続けているのです。

この文面には特に政治に関心があるとはいえないごく普通の主婦であり母である女性が、政党への幻滅を感じ、ブラック・サッシュの活動に親近感をもったことがよく表れている。活動が具体的であり、様々な情報伝達、開示に努めたことが信頼を勝ち得たといえる。

〈意義あることと希望〉

次にシェイラ・ニューマンという女性からの投稿をみってみる；

かつて私のなかにほとばしっていた恐怖、絶望、焦燥感といった感情は今や意義と希望のある道筋へと向けられてきています。何もかも奪われ、抑圧された人々への支援に向けた全ての努力、抗議の中で語られた全ての声、全ての行動が、どれほどささやかなものであっても、私は今では最終的には私達に有利な方へ秤は僅かに傾くと思っています。誰が言ったか分かりませんが“人が犯す最大の過ちは大したことはできないからといって何もしないことである”。しかし、非常に多くの人がこの過ちを犯しています。

私は、政治的道義を下支えし、人間として生きる権利を奪われた人達を助けようという闘いのなかで自らの時間と喜び、楽しみを進んで犠牲にしようという女性達のなかにいることを誇りに思っています。

私の主人の靴下はしばしば十分に繕われていませんし、家の中はごった返していますが、私は

心地よい気分です。というのもこの闘いはそれだけの価値があり、私の傍らにいる女性達もまたそうであるから。

ここには、無力感に苛まれるのではなく、自分にできることを行うことが大事であるという主張と共に、家庭以外に自分の居場所を見つけた喜びも表現されている。

以上見てきた声は編集を踏まえた上で掲載されているものであり、その点を考慮しなければならないが、ブラック・サッシュに参加した人々の様々な理由を代表していよう。理由は、参加した人の数だけあるだろうが、注目すべき特徴として政治的な関心を持ち、積極的な活動意志を持って参加した人だけでなく、ごく普通の政治に関心のなかった女性も参加しようという気になったという声もかなりあるということである。このことは女性、しかも「白人女性」が積極的に政治に関わることが稀な時代であり、自分の価値観に応じて選択できるほど活動の受け皿が細分化されていなかったということもあるだろう。その分、ブラック・サッシュの登場が広く社会、政府に対して鬱屈していた感情を受けとめる受け皿となりえたのである。また、ブラック・サッシュという運動体が当時もっていた要素が良い方向で生かされたことが文面にも出ている。つまり；

- ・設立時の経緯（知り合いが知り合いに声をかけていった）からも全体として「顔の見える」関係のなかで発展していった。
 - ・会員となった人が自分の地域で活動を展開したことで、地域密着の活動形態により人も活動も周囲に把握されやすかった。
 - ・政治家や名のある活動家ではなく、イメージだけでなく、実際にも普通の「妻」であり「母」である女性達も多く参加していたことで親近感を持ってもらいやすかった。
 - ・行為の分かり易さ、参加し易さ、具体性。設立当初は上院法上程の反対という目標が、人々に訴えかける上で分かりやすい具体的な目標であったこともあるが、デモ、スタンド（抗議のための街頭立ち）といった活動も特別の技術を要しないため、参加しやすかった。
 - ・上院法上程の反対に関連してそれまでの政府への政治的不満を吸収するはけ口となったこと。そのため参加者の理由を拒まなかった。
- 以上のような点が功を奏していたといえよう。

なぜ参加しなかったのか

一方、参加しなかった人達の理由はどこにあるのだろうか。結成直後の声を知る手がかりはないが、1959年11月に発行された機関誌 The Black Sash では“Why I Didn't Join the

Sash”と題したページが生まれ、そうした人達5人の声を取りあげている¹⁰。

〈共産主義者というラベル〉

ベティ・サックスと名乗る女性は次のように記している。

なぜ、私はこれまでのところブラック・サッシュに参加せず、その賞賛に値する尽力に対して積極的に支援していないのか？

当初は、ブラック・サッシュがかつて共産主義者だった人達を支援することが、自分がいくら会員となって貢献したとしてもそのことが貢献をかき消すくらい組織に悪影響を与えると感じて参加しなかった¹¹。政治的色づけは、こびりつく。幻滅や心変わりについての紆余曲折の説明は何の足しにもならないし、沈黙しているからといって中傷していないわけではない。

ついに理想主義的な夢から抜け出したと述べている私の言いたいことは何か？私は次の事実に目覚めたのです。全ての独裁は、悪であるだけでなく、共産主義、あるいはマルクス主義の全ての理念には少なくとも2つの根本的な欠陥があるということです。それは、手段が目的を正当化し（よい目的は悪い手段によっては達成されないと心から思っています）、個としての人間の重要性を否定しているということです。

はじめブラック・サッシュは人を勧誘し、認めてもらうことに苦労しなければなりません。そうした苦労に加えて、共産主義の影響があると言われるような危険を犯していたら馬鹿らしかったことでしょう。今日そうした危険はほとんどありません。ひとつにはブラック・サッシュが政治家の道具に墮することなく民主的な理念を守ろうと活動し、犠牲を払っている女性達の集まりだということをしっかりと確立してきたからです。また、ある一人の会員の過去の政治的な繋がり、広く全国レベルで会員がいるまともな確立された組織にとってはほとんど重要ではないからです。

しかし、今日私が気にする範囲において別の要因が働いています。私らは皆、歳を多少とり、いち“参加者”であった頃から私は委員会や組織的な活動が非常に嫌いになってしまいました。それは自分が誇るところは全くありません。事実、それは非常に言い訳のしようがないのです。私の委員会は2人まで減り、私は自分の人生から彼女達が消え去ってくれる幸せな日が来るのをとても心待ちにしています。

何という告白でしょう。

¹⁰ *The Black Sash*, vol.3 no.23 November, 1959, pp.10-11.

¹¹ ここではかつての共産主義者というのが具体的にブラック・サッシュのどのような活動、関わりを指しているのかは記述されていない。しかし、実際のところブラック・サッシュ自身は共産主義（者）に対しては距離を置いていた。そうした姿勢を示すエピソードとしてFSAW（後にFEDSAW）との連繋問題がある。FSAWは1954年4月、「会議同盟（Congress Alliance）」内で指導的立場に就いていたアフリカ人女性達が中心となって結成された組織である。メンバーシップは全ての人種に開かれ、白人のメンバーを取り込むことにも積極的であった。FSAWはブラック・サッシュにその設立当初から関心を示し、連繋を求めてきた。しかし、当時、FSAWは会議同盟と関係があり、共産主義への傾倒があった。そのためFSAWと連繋することにより持たれてしまう政治色への懸念から、ブラック・サッシュは、その後長年にわたってFSAWから距離を置き、連繋を断り続けてきたという経緯があった。Mary Burton, “Women Ƴrganise”, *SASH*, vol.30 no.2 August 1987, p14.

ですから、遠くから私はみなさんの活動を賛美し、会員の穴を埋めてくれる気高い女性達を多く勧誘できるようにと祈っています。

ここでは、共産主義への嫌悪感が参加を拒むひとつの要因として働いていたことが分かる。当時ANC（アフリカ民族会議）をはじめ反アパルトヘイト運動を展開していた多くの政治組織が共産主義思想を取り入れていたためにこのような連想を生み易かったと言える。政府も1950年に「共産主義弾圧法」を制定するなど「共産主義」＝「悪」というイメージを流布させてもいた。

〈白人のみ〉

次は ALL THE WAY と名乗る女性からである；

自由を求める私のささやかなひとりでの闘いに、良心から方法をついに見つけねばとなったときブラック・サッシュか自由党かで迷いました。最終的には自由党に決めました。そのように決めた理由は、アフリカ人女性を歓迎していない組織に自分を捧げることへのためらいにありました。

アフリカ人女性達は苦勞し、孤立した闘いの中にも勇気をもっているなかであって私たちの支援や仲間の支えは受けるに値するだけでなく、純粋に現実的な理由からでもあります。つまり、此の国の10分の8を占める女性達を拒否する組織に新しい南アへの必然的な移行に際して真に影響を及ぼすことはできないということです。

というのも個人的に私は自由党だけが唯一本当の非人種的な民主主義を求めて闘う用意のできている政党だと信じています。そして、自分の力を集中するに値すると感じています。

勿論、ブラック・サッシュには会員資格を制限する多くの有用な理由があります。当面の目標においてはこれが最善の策かもしれません。うまく行って欲しいと願い、理念に関わる問題にひるむことのない態度をとり続けていることを賞賛していますが、最終的な考えとしてはブラック・サッシュが我が国の問題に対して何らかの重要な解決を提供できるとは信じていません。

ここでの意見は、たびたび問題となった参加者の加入資格問題に関わっている。設立当初、人種問題にまで踏み込む気になかった設立者達は、加入資格を選挙権をもつものに限るとした。当時、選挙権をもつ女性は白人女性しかいなかったため、結果的にはアフリカ人女性を排除する形となった。後年、設立者の一人であり、長年代表を務めたジーン・シンクレアー（Jean Sinclair）は、「人種差別」に対して保守的な考えであったことを認めている。しかし、当時「人種差別」への反対を強く表明していたなら、逆にあれだけの女性達を動員できたか疑問であるという感想を述べてもいる¹²。

¹² ミッチェルマンとのインタビューより。日時不明。Cherry Michelman (1975) *The Black Sash of South Africa: A Case Study in Liberalism*, London, New York, Cape Town: Oxford University Press, pp.35-6.

〈男性がいなければ意味はない〉

次はフェミニストと名乗る女性からである。

サッシュの会員はこのことで私に石を投げつけたくなるかもしれないでしょうが、それは不公平だろうと思います。というのは心の底では、私はいつも闘うフェミニストですから。

私は今までのように劇的にはブラック・サッシュの発展は将来ないだろうと思っています。それは、純粋に女性達の運動だからです。多くの場で私らが恥ずかしく思い、忌み嫌う事実として女性組織は—とりわけそれが慈善的というよりも先鋭的なら—大方の男性には微かに奇妙なものとして映ります。男性がいなければ広い意味でこの運動は全国には広がり得ません。

ブラック・サッシュの目的は素晴らしいし、「全ての」南アフリカ人に影響を与えるものです。全ての男性や若者を排しておいてどうやって発展していくと思えるのですか？

ここでは女性以外に多様な人、特に男性を巻き込まないと運動が成功しないという指摘がされている¹³。これも先の参加資格に関わる問題であり、男性会員についてはその後も議論の対象となった経緯がある。

〈銃を下ろして〉

賛同者と名乗る女性は次のような意見をよせている：

サッシュに参加しない理由はそれぞれだと思います。私の友人の多くは沈黙の抗議を信じていません。それに個人的にはあのように立っているのはバカみたいに感じるだろうからとも。彼女達の大半はこう付け加えています；サッシュの人達はとても気高く理想主義的だけど、単に時間の無駄。

また、夫達からの視点で見ると、自分達の妻におおびらに支援させることはきっぱりと拒否する人もいます。仕事の繋がりや顧客の反感を買うのを恐れています。

昨日、私は数年前にこの国に政治的、宗教的亡命者の保護を得た家族の女性に話しかけました。彼女は、サッシュの考え方に十分賛同しているものの、他の国からやってきて他国では拒否され、ここで利潤を得ているような人達には、感謝の念がありすぎてここで何かしらの採め事を積極的に起こすことは全くできないと言っていました。

さらに、彼女は次のようなことを恐れていました。そのようなものに参加することで最終的には彼女の得がたい身の安全を脅かし、彼女が属する宗派の代表者に報復がもたらされるかもしれないと。

非常に多くの女性達はかなりの程度慈善行為に関わっています。脳性小児麻痺、心臓病の診療、

¹³ この指摘にはブラック・サッシュが抱えていた懸案事項が示されている。つまり、男性会員の有無についてである。会員の夫達のなかには妻が会員になったことで「はからずも」協力せざるを得ない状況になった人もいた。特に、妻が仕事での収入源をもたない場合、金銭的援助に関しては夫がするしかなかったからである。こうした関わりを持つうちに男性の処遇をどうするかという議論が出てきた。結局、賛助会員という立場で金銭的援助は可能でも発言権はないという立場に一応、収めた。

カフダ、食料援助、その他様々なことやらに任せてこ舞いです。彼女達は全てをやることはできないといっています。そうした性質の活動は彼女達にもっと建設的な高揚感を与えているようです。つまり、全ての努力は無駄にせず、見返りがすぐにあること。ですから彼女達は選択してきました。政治や政治の場を改革しようという試みを切り捨て、単に自分の自由時間とエネルギーを健康や社会状況の改善に注ぎます。必要に迫られた場や、どのような制度下でも。

私の理由ですか？

憤懣やるかたない20代と闘いの30代を経験してきました。私の疲れた皮肉めいた40代では、3つの失われた選挙を振り返っています。そして、全ての希望と夢はトーチコマンド (Torch Commando) と共に崩壊したのです。何と辛く無駄な活動だったでしょう。

かつて若き闘士で、長い年月を政治の壁に向かって無駄に悩ませてきた私のような女性は、そうした歩みのなかで少女らしい笑いを失ってしまったのです。私達は目標を達成するには際限のない活動と同様に際限のない信念と熱意を要求する運動に対して自分達の有用さを生き永らえさせてきました。成功の自信は散々に打ち砕かれ、今や我々の幻滅は促進したいと願っていた主義にダメージを与えているだけです。熱意のある自信に満ちた若者から我々は距離を置くほうがいいのです。彼らに苦い敗戦の毒を注射しないように。

彼らの刃先が長きにわたって鋭いままでありますように。そして、彼らがそれを思うがままの闘いのなかで自由に使えますように。闘いから手を引いた母は自らの銃を下ろしました。

ここにはそれまで若い頃から活動してきた女性の自らの運動での挫折体験が色濃くでており、そこからまだ方向性を見出すことができない状態である。また、ここで語られる「夫達」や冷ややかに見つめている女性達の話には、ブラック・サッシュがどう認識されていたのか、その一端が見えてくる。

〈誰も言ってくれなかった〉

Party Worker と名乗る女性は次のように述べている；

これまで誰も私にブラック・サッシュに参加するようにと言ってくれなかったし、実際、そうしたことは私の身に全く起こりませんでした。ですが、私は理念において人種差別 — 我々の不道徳な立法の根本にある — に反対する政党の党員です。このように実際私は自らの抗議を示しています。

しかし、私に印刷物や入会用紙を送ってください。そうすればたぶん、私は参加します。

彼女の場合はそれまでの不参加者の理由と違って、参加意欲はあるものの要請がなかったと述べている。すでに彼女のように政党の党員となって活動していることは別にしても、参加したくても自分の居住、行動圏内にブラック・サッシュとの接触の機会がなく、どのようにすれば参加できるのか分からない人もいただろうと推察される。そうした意味でこの女性の声は潜在的な参加者を想像させると言える。

おわりに

以上の様々の声を参加者、不参加者それぞれに分けて考察すると次のようなことが指摘できよう。

不参加理由（共産主義のラベリングという政治色との絡み、白人のみ、女性のみという参加資格の問題）には、ブラック・サッシュが抱える本質的な問題と関わるものが多い。

一方、参加者達の参加の背景にはブラック・サッシュ自体が組織化、専門化されていないが故のまた、当時の「女性」の社会的位置づけ（政府に抗議するということが珍しいと思われる存在。また、実際に難しかったという状況）が結果的にうまく利用されてのネットワークがあったといえる。つまり、政府の諸政策に不満をもつ女性は潜在的にいたもののその不満を吸収するはけ口・受け皿は不十分だった。そうしたところに従来のような男性による政治組織ではなく、自分達と同様に政治からは離れていると思われる女性達によって目標が分かり易く、参加し易い（署名やデモ抗議など特殊技能を必要としない）方法で活動を展開したこと、更には顔の見える関係のなかで活動を展開したことが、参加者に安心感を生んで人のネットワークを広げたといえよう。

（かみくぼ かずよ 本学非常勤講師）